

# 中古語における視覚動詞「見る」の補文

辻 本 桜 介

## 1. 研究対象

日本語の知覚動詞や伝達動詞はト・ノ（ヲ）・コト（ヲ）といった複数種の補文標識と共起する。こうした諸形式にどのような使い分けがあるかという問題は現代語の文法研究において高い関心を集めてきたが、歴史的観点からの研究はさほど進んでいないように見受けられる。

本稿では中古語の視覚動詞「見る」を取り上げ、次のように複数種の補文形式と共起することに着目する。

- (1) a. [私の身内の者が] けさ, [あなたが私の家から] いでたまひつるを見てけり。(平中・九・471)
- b. 大納言殿は物々しう清げに, 中将殿はいとらうらうじう, いづれもめでたきを見たてまつるに, 殿をばさるものにて, 上の御宿世こそいとめでたけれ。(枕草・一〇〇・204)
- (2) a. ついたちの日の夜, 雪のいとおほく降りたるを, 「うれしくもまた降り積みつるかな」と見るに, …(枕草・八三・158)
- b. 宮も, この御さまの常よりことになつかしようちとけたまへるを, いとめでたしと見たてまつりたまひて, 婿になどは思しよらで, 女にて見ばやと色めきたる御心には思ほす。(源氏・紅葉賀・1-318)

(1) のようにヲ格で補文を示すもの（以降, 「を見る」と記す）は単純に視覚対象を承けるだけであるが, (2) のようにトを補文形式とするもの

(以降、「と見る」と記す)は、その補文内部に「見る」の主体の視認内容が現れる。このトは引用助詞であり、前接要素の種類に統語的な制限はない。(2a)では終助詞カナを承けているが、こうした要素を承げるか否かという点が「を見る」と「と見る」の明らかな相違点であることは、わざわざ論じるまでもないだろう。また、(2b)の「めでたし」が視覚主体による評価を示すのに対し、(1b)の「めでたき」は視覚主体による評価を示すわけではないと解されるが、このように「を見る」と「と見る」とで前接要素に地の文と心中言に相当する相違が生じてくるということも、改めて言うまでも無いだろう。

しかし、次の(3)(4)のように視覚主体による態度・評価が補文内部に含まれない場合、「を見る」と「と見る」との間に使い方の差は殆ど無いように見える。

(3) … [私は] 忌むことのしるしによみがへりてなん、[あなた様が] かく渡りおはしますを見たまへはべりぬれば、今なむ阿弥陀仏の御光も心清く待たれはべるべき。(源氏・夕顔・1-138)

(4) 大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、[帝が] いますこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなんと深く思はすべかめる。(源氏・絵合・2-392)

これは現代語の「見る」の使い方とはっきり異なっている。

(5) 私は、花子が来るのを見た。

(6) 私は、花子が来ると見た。

(5)の「のを見る」は花子が来る様子を目視することを意味するが、(6)の「と見る」は主体の判断を表すだけであって、主体が肉眼で何かを目視することを表してはいない。現代語の「見る」の場合は補文形式の使い分けが鮮明である。

拙稿(2016)において和文資料の「と見る」について検討した際には、前接語句(引用語句)として現れる助動詞や形容詞の種類を分析するととどめ、他の語彙の現れ方については立ち入った検討をしなかった。本稿で

は、特に動詞を承ける場合に着目し、「と見る」と「を見る」の間の意味的な類似点・相違点について詳しく考えることにしたい。

## 2. 調査の概要

用例の調査は、和文資料の主なものと9～11世紀加点の訓点資料を対象として行った。具体的な資料は後に示す表1～4で一覧にしてある。訓点資料の調査においては、「見」「看」「察」「瞻」「観」「視」「覧」<sup>(1)</sup>の全例を対象として、単独で動詞的に用いられているものは全て「みる」と訓読するものと見なし<sup>(2)</sup>、全例を抽出した。その上で、トとヲが片仮名かヲコト点で示されている用例のみを選んで前接語を観察した。また、補読として付された訓点の「みる」の用例<sup>(3)</sup>も採った。

表1～4では、得られた「を見る」と「と見る」の全用例において前接する活用語の<sup>(4)</sup>状況を示した。表1・2は和文資料の集計結果、表3・4は訓点資料の集計結果である。表3・4では解説文から得た全例の数を示してあるが、そのうちで前接語の活用語尾の全部または一部が解説者の推定となっているものの例数を（ ）に示した。動詞に関しては、「あり」「はべり」等の存在を表す動詞、複合辞化していると思われる「といふ」<sup>(5)</sup>、自発動詞の「見ゆ」を状態動詞とし、他は全て動作動詞として集計してあ

(1) これらの漢字は、築島裕『訓点語彙集成』（汲古書院、2007年）において「みる」と訓読される例が比較的多かったものである。

(2) 対象とした漢字の用例の中には送り仮名等も含め全く訓点の付いていないものも少なくないが、「みる」以外の訓読方法が訓点で示された用例は見当たらない。全て「みる」と訓読したものと推定される。

(3) 例えば次のようなものなど。

(i) 我が夢の中に見たる所の爾の乳皆割(ら)被ヌ。牙齒悉ク墮落シヌトミシハ今大苦痛に遭はむとなりケリ。(金光明最勝王經・195-12)

(4) 活用語以外の語との承接に関しては「を見る」と「と見る」の相違が明白なので検討対象から省いた。例えば名詞を承ける場合、「と見る」は「…を＋名詞＋と見る」という文型（いわゆる認識動詞構文）になり、「を見る」との違いは明らかである。

(5) 石垣（1956：250-251）の指摘による。

る。この分類方法では殆どの種類の動詞が動作動詞と判定されることになるが、用例分布の概況を知る上で特に問題は無いだろう。

さて、和文資料の全体的傾向を見る限り、「を見る」も「と見る」も様々な要素を承けることが分かる。そして、前述したように「を見る」の前接語は視覚主体の態度・評価を表さず、「と見る」の前接語はそれを表しうるといふ相違が認められるとしても、訓点資料の用例に関してはこの相違が全く顕在化しない。すなわち、訓点資料の「と見る」は評価形容詞を承ける用例が殆ど無いのである<sup>(6)</sup>。この点において訓点資料の「を見る」と「と見る」は極めて近い意味を表すように見える。9～11世紀にかけての訓点の変化に注目すると、「と見る」が10世紀以降見られなくなり<sup>(7)</sup>、訓読方法が「を見る」に限られてくることが分かる。これは、初期の訓点において「を見る」が「と見る」の意味領域を包含するような関係があったことを示唆してるのではないだろうか。「を見る」よりも「と見る」の意味領域が狭いという予測は、以下で行う分析結果からも支持されるものである。

- 
- (6) 表4には示していないが、終助詞を承ける用例もほぼ見られない。視覚主体の評価を示す形容動詞を承ける用例として、次のものが得られているに過ぎない。

(i) 尔時、奄婆羅婆提、仏千二百五十(の)比丘と[与]俱に、人間(に)遊行して、毘舍離(に)來詣(したまひぬと)聞(きて)、即(ち)車に乗(り)て世尊(の)所に往(きて)、遥(か)に世尊(の)相好端巖なりと見て、恭敬し歎喜す。(願經四分律(岩淵本)・534-6)

訓点資料の「と見る」が承ける形容詞は「無し」のみであった。

(ii) 問曰汝か五陰の中には衆生無しと見(る)と説かくは何れの五陰に因(り)てか説(き)て衆生と名(づく)ル。(成実論・二十三・44-18)

- (7) 調査した10～11世紀の訓点資料では、前接語の活用語尾に解説者の推定による補読を含む次のような用例を除くと、「と見る」の用例はほぼ皆無である。

(i) 我、此(の)難に於ては、正(しく)由无(し)と見て、安隱に(し)て怖(るること)无く大仙(の)位に處(せりと)のたまへり。(妙法蓮華經玄贊・177-4)

表1 和文資料において「を見る」が承ける要素

[illegible]

表2 和文資料において「と見る」が承ける要素

[illegible]

表3 訓点資料において「を見る」が承ける要素

資料		マが承ける要素	動詞		形容動詞	形容詞	助動詞												断定ナリ	合計
							態		相			法								
		動作動詞	状態動詞			ラル	シム	タリ	リ	ヌ	ム	ムトス	ムト欲ス	ゴトシ	ゴトクナリ	マジ				
全資料合計		82(21)	30(8)	6(2)	5(1)	2	1	10	30(4)	4(1)	9(2)	1	2	5(1)	1	1	3(2)	192(42)		
9世紀頃加 点	四分律		2	2					3	1								8		
	願經四分律(岩淵本)	2(1)					1	2	3(2)			1						9(3)		
	願經四分律(小川本)	1(1)	6(4)		1			2										10(5)		
	願經四分律(聖語藏本)		1					1										2		
	成実論	13(5)	3	1	1(1)	1			4	2(1)				3(1)				28(8)		
	金光明最勝王經	22(2)	9	1		1			4	1	5		1	1		1		46(2)		
	妙法蓮華經								1									1		
	金光明最勝王經註釈	3(1)																3(1)		
	大唐三蔵玄奘法師表啓																1	1		
	大智度論	10(3)	1	2(2)	1				2				1					17(5)		
	地藏十輪經	3(1)	3(3)	1				4	5(2)		2(2)							18(8)		
	大方広仏華嚴經	10(5)	1	1	2				3								2(2)	19(7)		
	百法顯幽抄	8(1)	1						1		1							11(1)		
	合計	74(20)	27(7)	6(2)	5(1)	2	1	9	26(4)	4(1)	8(2)	1	2	4(1)	0	1	3(2)	173(40)		
10 ゝ 11世紀頃加 点	弁中辺論																	0		
	漢書楊雄伝								1									1		
	妙法蓮華經玄賛	3(1)	1(1)						1		1							6(2)		
	無量義經																	0		
	無畏三蔵禪要																	0		
	蘇悉地羯羅供養法																	0		
	七曜三平等十无上義																	0		
	沙弥十戒威儀經	1	1															2		
	仏説太子須陀拏經	1	1						1					1				4		
	不動儀軌								1									1		
	護摩蜜記																	0		
	不空羂索神呪心經	1												1				2		
	惠果和上之碑文(東大本)																	0		
	南海寄帰内法伝	2						1										3		
	梵字悉曇字母并釈義																	0		
惠果和尚之碑文(高山寺本)																	0			
合計	8(1)	3(1)	0	0	0	0	1	4	0	1	0	0	1	1	0	0	19(2)			

表4 訓点資料において「と見る」が承ける要素

資料		トが承ける要素	動詞		形容動詞	形容詞	助動詞										合計
							相				極性	法		断定ナリ			
			動作動詞	状態動詞			タリ	リ	ツ	ヌ	ズ	ム	ゴトシ		ベシ		
資料																	
全資料合計			20(2)	34(17)	1	11(7)	1	8	2	9	8	1	7(2)	2	25(2)	129(30)	
9世紀頃加 点	四分律		2(1)													2(1)	
	願経四分律(岩淵本)			1												1	
	願経四分律(小川本)		1(1)											2		3(1)	
	願経四分律(聖語藏本)		3(3)													3(3)	
	成実論	8(1)	8		4(2)					1		5		15(2)		41(5)	
	金光明最勝王経	3	9(1)		1	1	3	1	5	2	1		1	2		29(1)	
	妙法蓮華経															0	
	金光明最勝王経註釈															0	
	大唐三蔵玄奘法師表啓															0	
	大智度論	3(1)	5(5)		2(1)		1						1	5		17(7)	
	地藏十輪経	2					3									5	
	大方広仏華嚴経	1					1									2	
	百法顕幽抄	3	6(6)					1	4	4					1	19(6)	
	合計	20(2)	34(17)	1	7(3)	1	8	2	9	7	1	5	2	25(2)	122(24)		
10 ＼ 11世紀頃加 点	弁中辺論															0	
	漢書楊雄伝															0	
	妙法蓮華経玄賛				4(4)							2(2)				6(6)	
	無量義経															0	
	無畏三蔵禅要															0	
	蘇悉地羯羅供養法															0	
	七曜三平等十无上義									1						1	
	沙弥十戒威儀経															0	
	仏説太子須陀拏経															0	
	不動儀軌															0	
	護摩蜜記															0	
	不空羼索神呪心経															0	
	惠果和上之碑文(東大本)															0	
	南海寄帰内法伝															1	
	梵字悉曇字母并釈義															0	
	惠果和尚之碑文(高山寺本)															0	
合計	0	0	0	4(4)	0	0	0	0	1	0	2(2)	0	0		7(6)		

### 3. 「を見る」が承ける準体言の性質

まず、「を見る」が承ける準体言の性質について考える。準体言は何らかの名詞を消去した形として解釈できるが、それがどのような名詞であるかによって、「を見る」と「と見る」の意味的な相違がはっきりする場合と、そうでない場合とがある。本節ではこの点について整理しておきたい。

- (7) 八日の日、未の時ばかりに、「おはしますおはします」とののしる。中門おし開けて、車ごめ引き入るるを見れば、御前ののをのこども、あまた、轅につきて、簾巻きあげ、下簾左右おし挟みたり。(蜻蛉・下・288)
- (8) なのにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむと思はゆるも、わりなきことなりや。(源氏・御法・4-510)

これらは、波下線部の述語と格関係を持つ体言を補って、次のように解釈することができそうである。

- (9) 中門を押し開けて車ごと引き入れる人たちを見ると…
- (10) 並一通りなどでは全くなく、またとなく美しい人を見ると…
- (9) (10) では「人たちが引き入れる」「人が美しい」のようにガ格が想定される名詞を補った解釈を示した。この解釈が適切だとすると、(7) (8) のような「を見る」は、補われる名詞の表す事物を視覚対象としていることになる。この場合に注意すべきは、(7) (8) の波下線部が表す事態は「見る」の表す視覚の対象になっていない可能性がある、という点である。現代語で考えるなら、次のようなことである。

- (11) 車を入れる人たちを見たが、車を入れる瞬間は見ていない。
- (12) 太郎は顔が美しい人を見たには見たが、後ろ姿しか見ていない。
- (11) (12) において、名詞の表す事物が視覚対象になっていることは確実



だが、名詞に対する連体修飾節の事態は視覚対象になっていない。連体修飾節の事態が視覚対象になっていると読める用例があるとしても、それは前後文脈から生じる含意に過ぎないのである。おそらく中古語もこれと同様であろう。

もし、「を見る」が承ける準体言に関して想定される被修飾名詞が、上述のように準体言内部の述語と格関係を持つものであるとすれば、「を見る」は「と見る」とは全く異なる意味構造を持つことになる。すなわち「を見る」が承ける準体言の表す事態は視認されていない可能性があるのに対し、「と見る」が承ける節の表す事態は確実に視認内容になっている、という違いである。この可能性について考えることは重要だろう。実のところ、「を見る」の承ける準体言に対してどのような名詞が補完されるのかは、確実な判断が出来ないケースが少なくないのだが、少なくとも、準体言内部の述語と格関係を持つ名詞が補完されるとは考えられない用例が一定数存在するという事は確実と考えられる。

中古語の準体言について整理した近藤（1981）に従うと、まず、次の例の準体言（下線部）は被修飾名詞として「散る」と格関係を持つものを想定できない。

- (13) 春宮の帶刀の陣にて桜の花の散るをよめる（古今・85, 近藤 1981: 27 の用例 63 に相当）

これは「桜の花が散る様子」等の解釈になり、想定される被修飾名詞（「様子」等）と準体言とは意味的に同格の関係があると判定されることになる。近藤（1981）はこうした準体言を同格準体と呼び、このように判定できる根拠として、「散る」が動作を表す用言であることと、準体言内部に「桜の花の」という形で「散る」と格関係を持つ語（連体修飾語「散る」に対する主名詞になりそうなもの）が既に現れていることを挙げている。この判定方法が有効となる理由は近藤（1981）において詳細に論じられているので本稿では触れないが、同様の判定方法によって中古語の「を見る」の中に同格準体を承けるものが存在することを確認したい。

- (14) やんごとなき上達部の持ちてめぐりたまふを見る人々，「いみじう老いのさいはひ，面目ありける人かな」と誉む。(落窪・三・265)
- (15) このいまひとかたの出で入りするを見つつあるに，いまは心やすかるべきところへとて，ゐて渡す。(蜻蛉・上・102)
- (16) むかし，男，梅壺より雨にぬれて，人のまかりいづるを見て，…(伊勢・一二一・213)
- (17) …涙のこぼるるを人の見るもはしたなけれど，目もあやなる御さま容貌のいとうしう出でばえを見ざらましかばと思さる。(源氏・葵・2-24)
- (18) 王復更に前行したまひしに，次の大臣の至ルを見つ。(金光明最勝王經・198-19)
- (19) …方便を(も)て救心(を)求(め)て，暫(く)も捨(て)不<sup>ス</sup>ガ如く，菩薩の諸の衆生の五道の苦(を)受(く)るを見て，之を念(ふ)こと，父の如くすること亦復(た)是の如し。(大智度論・877-9)
- (20) 諸(の)衆生の大苦(を)受(く)るを見て，大慈悲を起(し)て世間に現シ，法の光明を演(べ)て暗冥を除す。(大方広仏華嚴經・366-13)
- (21) 息遍身とは[者]行者身の虚キンとを信解して[則]一切の毛の孔より風の行し出入するを見(る)なり。(成実論・二十一・85-上3)

準体言の述語(波下線部)は動作を表すものであり，準体言内部にはその主語と解される要素(二重下線部)が生起している。従ってこれらの「を見る」は同格準体を承けると判断され，準体言の表す事態が視覚対象になっていることが分かる。なお近藤(1981:27)は以上のような構造を持たない準体言を承ける次のような「を見る」の用例を挙げ，「〈月のおもしろく出ている様子〉を見ているのか，〈月で，おもしろく出ているの〉を見

ているのかの区別」が付きにくいとも述べている。〈月のおもしろく出ている様子〉の解釈では以上の用例と同様に準体言の事態が視覚対象となっているが、〈月で、おもしろく出ているの〉の解釈では視覚対象となっているのは補完すべき被修飾名詞の「月」ということになる。

- (22) …かぐや姫、月のおもしろういでたるを見て、つねよりも、物思ひたるさまなり。(竹取・63, 近藤 1981: 27 の用例 61 に相当)

以上のように、(14)～(21) のような構造の用例では準体言の表す事態が視覚対象となっていて「と見る」との意味的に類似し、他の構造の(22) のような用例では確実な判断ができないものの、同様の解釈ができる可能性は残る。準体言の性質という観点からは、「を見る」と「と見る」の意味的な相違点を鮮明にすることは難しいようである。

#### 4. 動作動詞を承ける「と見る」について

さて、着眼点を変えて「を見る」と「と見る」に前接する語彙に目を向けてみたい。表 2・4 によって「と見る」の前接語の状況を見る限り、様々な要素が自由に出ているようであるが、これを表 1・3 の「を見る」と比較すると、動作動詞が著しく少ないことに気付く<sup>(8)</sup>。そこで、「と見る」が動作動詞を受ける用例がどのようなものかを詳しく観察することにする。

##### 4.1 夢の内容の引用

まず夢の内容を引用するものから見る。和文資料においては動作動詞を承ける 28 例のうち 12 例、訓点資料においては動作動詞を承ける 20 例中 8 例が、次のように夢の内容を引用するものであった。

- (23) 二十日ばかり行ひたる夢に、わが頭をとりおろして、額を分く

(8) 他に、訓点資料の「と見る」に限って断定ナリを承ける用例がかなり多い点なども見受けられるが、今後の課題としたい。

と見る。(蜻蛉・中・223)

- (24) 君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、  
「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、たどり歩くと  
見るに、おどろきて、さは海の中の竜王の、いといたうのめ  
でするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとのむつ  
かしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。(源氏・須磨・2-219)
- (25) これをのみ心にかけたるに、夢に見ゆるやう、「このごろ皇太后  
宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむつくる」といふ人  
あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」とい  
ふと見て、人にも語らず、なにとも思はでやみぬる、いといふ  
かひなし。(更級・300)
- (26) 願フ我レ当に〔於〕未来の世に、生在セむ無量無数劫に、夢の  
中に常に〔見〕大金鼓の、懺悔を顕し説ク音を聞(く)コト得  
と見む。(金光明最勝王經・81-9)
- (27) 若(し)善男子・善女人(の)、夢の中に〔於〕、意を發して六  
波羅蜜を行し、乃至、道場に坐すとミム。(大智度論・664-3)
- (28) 第七の夢は一の弥獲極(め)て劣なり。衆の弥獲共に扶(け)  
て王と為す。四大海の水を將<sup>ナ</sup>頂<sup>もちて</sup>に灌ぎ已(り)て王を立すと見  
(る)〔也〕。(百法顯幽抄・105-17)

動作動詞を承ける用例のうち、こうした特殊な文脈のもの<sup>(9)</sup>が4割ほどを占めている。仮に残りの6割ほどが事物を目視することを表す用例として認められるとしても、それは夢の引用のような特殊な文脈の用例と同程度に珍しいものということになる。

また、幻視の内容を引くと解される例が和文資料で1例、訓点資料で2例得られた。

(9) 山口(1998:2)は中古和文から広く「夢」の内容が引用されている事例」を収集しているが、出現作品が限られ、得られる用例も相応に少ないことを指摘している。

- (29) …、今は限りの御心に、やがて思し入りて、暗うなりにしほど  
 の空のけしきに御心地まどひにけるを、さる弱目に例の御物の  
 怪のひき入れたてまつるとなむ見たまへし。(源氏・夕霧・4-450)
- (30) 華莊嚴三昧といふは〔者〕、是(の)三昧(を)得るときには  
 〔者〕、十方の仏、七宝の蓮花の上に坐(し)たまひて、虚空の  
 中にして〔於〕宝蓮花を諸仏の上に〔於〕雨(る)と見る。(大  
 智度論・789-3)

(29) は物の怪の動きを見る例、(30) は蓮華を雨として見る例である。  
 これらの「見る」は現実を目視することを表してはいない。夢の内容を引  
 用する「と見る」に準じて捉えられよう。

#### 4.2 複合辞と思しい用例

夢・幻視の例を除いた残りの用例は、具体的な人物が事物を目視するこ  
 とを表すものか疑問の持たれるものが大部分を占める。以下、それらを全  
 て挙げて検討しておきたい。

- (31) 小法師ばらの、持ちあるくべうもあらぬおに屏風の高きを、い  
 とよく進退して、暈などをうち置くと見れば、ただ局に局ねた  
 てて、犬防ぎに簾さらさらとうちかくる、いみじうしつきたり。  
 (枕草・一一六・224)
- (32) 咲くと見てかつは散りぬる花なれば負くるを深きうらみともせ  
 ず(源氏・竹河・5-80)
- (33) [あなたは] かけざりしかたにぞ [=心にかけても居なかった私  
 に] はひし [=まつわりついた] 糸なれば解くと見しまにまた  
 みだれつつ [=また他の女の所に行ってばかりです] (堤中・  
 390)
- (34) [宮が] 前近き透垣のもとに、をかしげなる檀の紅葉のすこしも  
 みぢたるを、折らせたまひて、高欄におしかからせたまひて、  
 言の葉ふかくなりけるかな [=私たちの言葉も深くなりまし

たね]

とのたまはすれば, [女は]

白露のはがなくおくと見しほどに [=宮様からかりそめの言葉を  
を頂くと見て間もないうちに]

と聞こえさするさま, なさけなからずをかしとおぼす。(和泉・  
63)

- (35) おくと見るほどぞはかなき [=露が置いたと見るや, すぐ散っ  
てしまう] ともすれば風にみだるる萩のうは露(源氏・御法・4-  
505)

これらの「と見る」は、前接する節の事態に引き続いてすぐに後続する節の事態が起こることを示す形式(複合辞)<sup>(10)</sup>として解釈できる。(31)では具体的な視覚主体を読み取りにくくなっており、(32)~(35)は確実な解釈が難しいが、(31)と同様に具体的な視覚主体の存在を意味しないものと見ることは可能である。現代語では使いにくい印象もあるが、少し古い資料では次のような表現が容易に見出せる。

- (36) 法印, もっともらしくいいながら, いつか目が据わり, からだの中心が, 取れなくなって, 前に傾くと見れば, つんのめりそうになり, うしろに反ると見ると, ひっくりかえりそうになる。何しろ, 独酌で, 飲んでいるうちに, 御禁制の害に, お初に酌をさせに下りて来ようと思ひ立つまで, ほのぼのとしてしまっていた彼だ。(三上於菟吉『雪之丞変化』)

- (37) 「なるほど, 理窟だ, 怒らねえでやってくんな, こっちも真剣で見ているんだからな。それ兄さん, お志だよ」 見物の中からこう言って, バラリと錢を投げ込んだものがありました。「有難え」 と言って米友は, 足許に転がっていた蕎麦の策に柄をすげ

(10) 松木(1999:208-209)は現代語において接続表現として機能する「と見れば」等を取り上げ、後続節において「前件を受けての、後件の新たな事態」が示されるとする。

たようなものを、左の手で拾い取ると見れば、その投げた錢を  
らくにその中へ受け入れて、右の手ではやっぱり梯子を押えて  
います。(中里介山『大菩薩峠』)

- (38) 銭形平次と八五郎は、この晩町方の警邏の船に乗って、両国の  
橋間を縫って居りましたが、佐渡屋の涼み槽が、水の中へ落ち  
ると見るや、群がる涼み船を掻きわけて、辛くも現場に漕ぎ寄  
せ、遅れ馳せながらも二、三人は水の中から引きあげてやりま  
した。(野村胡堂『銭形平次捕物控』)

これらの「X と見ると／見れば／見るや」の例では、前の節と後の節と  
が時間的に近接する事態であることが示されるだけであり、具体的な人物  
が何かを目視する様子が描かれているとは言い難い。中古語の (31)～  
(35) もこれに相当する接続形式と解すことができよう。

次の2例は、視認内容を引用するものではない可能性がある。

- (39) まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば、人もこそ見たて  
まつりとがむれと見たまふ。(源氏・葵・2-78)
- (40) さて、いでていくと見えて、前裁の中にかくれて、男や来ると、  
見れば、はしにいでて、月のいといみじうおもしろきに、か  
しらかいけづりなどしてをり。(大和・一四九・382)

両者とも、視覚という行為とは別に、それとほぼ同時に生じる思考の内  
容を引用するものと解せる。すなわち、次のような用例と同様の構造を持  
つ可能性がある。

- (41) 暗く行き着くべくと、申の時ばかりに立ちて行けば、関近くな  
りて、(更級・293)
- (42) 行幸など見るをり、車の方にいささかも見おこせたまへば、下  
簾引きふたぎて、透影もやと扇をさし隠すに、なほいとわが心  
ながらもおほけなく、いかで立ち出でしにかと、汗あえて、い  
みじきには、何事をかはいらへも聞えむ。(枕草・一七七・311)

現代語でも「おはようと肩を叩く」「ここにいるかなとドアを開く」等の

言い方があるが、藤田（2000）はこうした引用構文について、引用句「…と」の表す発言・思考が後続する述語句の表す動きと同一場面に共存するものとし、「…と言う」「…と思う」のように「…と」の表す発言・思考が述語（句）の表す発言・思考と一致する構造の引用構文とは明確に区別している。

#### 4.3 視認内容を引用する用例

次の（43）～（45）は、具体的な人物の視認内容を引用すると解される。

（43）やがて急ぎ縫ひかけつるほどに、北の方起きて、〈縫ひさす〉と見しを、〈まだしくは、血あゆ [= 滴る] ばかりいみじくのらむ〉と思して、…（落窪・一・98）

（44）…わびしきさがなき朽軀の、さすがにいとよくものの気色を見て、かしがましきものなりければ、[娘が男と] かく文通はすと見て、文も通はさず、責め守りければ、…（平中・二十七・502）

（45）それ [= 自分の心に決めたことしかせず、他人を存在しないもののように扱う人は]、心よりほかのわが面影を恥づと見れど、えさらずさしむかひまじりゐたることだにあり、しかじかさへもどかれじと、…（紫式・205）

ただ、（43）の「縫ひさす」は縫うのを中断した結果状態（手が動いていない状態）を指すと読めるし、（44）の「通はす」も習慣的な事態と読める。（45）の「…を…と見る」という形は認識動詞構文と呼ばれるもので、通常、トが承けるのは形容詞などの状態を表す語であるから、「恥づ」もそう解すべきかもしれない。これらの動作動詞は、一回的な動きではなく、状態を意味すると解す余地がある点には注意したい。詳しくは4.5で述べるが、状態を視認することを表す「と見る」に準じて捉えることが可能ならば、これらの用例は必ずしも本稿の主張に反するものということにはならない。



#### 4.4 本文に疑問のある用例など

最後に、まとめて残りの用例について検討する。

- (46) 故宮の、つらう情なく思し放ちたりしに、いとど人げなく人にも侮られたまふと見たまふれど、かう聞こえさせ御覧ぜらるるにつけてなん、いにしへのうさも慰みはべる。(源氏・東屋・6-49)

- (47) ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおほつかな五月雨の空ことさらたどると見れば、「よしよし、植ゑし垣根も」とて出づるを、人知れぬ心にはねたうもあはれにも思ひけり。(源氏・花散里・2-155)

- (48) まことや、檜隈川は渡るとは見し [という下の句の歌は]、富小路殿の右大臣殿の方に、いひたるぞ。(平中・三九・532)

池田亀鑑『源氏物語大成』(1984-1985年、中央公論社)によれば、(46)の「と」は「も」となっている伝本(陽明家本)があり、(47)の「見れば」は河内本系統の伝本では「みゆれば」となっている。(48)は、和歌の下下の句である「檜隈川は渡るとは見し」について紹介する段の導入部分であるが、後の文脈で示されるこの和歌の下下の句「檜隈川はわたりはてにし」と異同がある。これらは本稿での主張内容から見れば例外的な用例だが、本文に問題があるように思われる。

訓点資料にも、疑問の余地が残る用例があった。

- (49) …若(し)自身の仏身と為セル相を念ずるトキには、[則]自身[於]仏の身に同(じ)ク衆相円満セリと見<sup>み</sup>、若(し)他身(の)仏身と為ル相を念ずるトキには、[則]他身イ[於]仏身に同(じ)ク衆相円満す<sup>み</sup>と見、若(し)一切の情非情数の有(ら)所る色像(の)仏身と為ル相を念(ずる)トキには、[則]一切の情非情数に有(ら)所る色像皆仏身に同(じ)ク、衆相を円満す<sup>み</sup>と見、其の余の一切の色像をば見不<sup>ず</sup>。(地藏十輪經・東大寺図書館本・140-16)

(50) 垢淨等因縁无(し)といふは〔者〕是の人此の垢法は自然(に)して〔而〕生すと見(る)をもちてなり。(成実論・十四・180-28)

(49) は動作動詞と思われる「円満す」を承けた「と見る」が2箇所あるが、その前の二重下線部では同様の文脈の中で「円満セリ」となっており、訓点の付け方に疑問が持たれる。(50)の「生すと見る」という形は、成実論において他に3箇所出ており(十四 179-7, 十四 183-32, 十五 108-22)、固定的な訓読方法かと思われる。それら以外に得られた「滅すと見(る)」「(十四 179-7)」「貪著すと見(る)」「(二十二 28-下 14)」「喜(ふ)と見(る)」「(十四 180-25)」「敗壞すと見(る)」「(二十二 19-下 7)」も全て成実論のものである。平安初期の一般的な訓読方法とは言い難いだろう。

以上、動作動詞を承ける「と見る」の用例を全て確認した。中古語の「と見る」は夢の内容を示す場合を除けば、基本的に動作動詞を承けることは無いと言える。あるとしても、夢の内容を引用するような特殊な文脈での用例と同程度かそれ以下の頻度でしか使われないと見て良く、本文上の問題を考えざるを得ないように思われる。

#### 4.5. 現象の解釈

さて、以上の状況をどう捉えたら良いか。先に結論から述べるならば、「と見る」は瞬時に捉えた光景を視認内容として示す形だと考えられる。これは、動的に展開する夢の内容を承ける「と見る」が動作動詞を承けることと対照的である。以下、助詞・助動詞等の付かない(いわゆる「はだかの形」の)動作動詞が持つアスペクトの意味についての先行研究を踏まえながら、「と見る」の用例の状況について考察を加えたい。

##### 4.5.1 文末の動作動詞が持つアスペクトの意味

「と見る」は文末相当の要素を承ける形であるから、前接語に動作動詞が現れない理由を探るには、動作動詞が文末で持つ意味、とくにアスペクト的な意味を考慮に入れる必要があるだろう。そこでまず、土岐(2003)、鈴

木（2009）、大木（2009）の指摘を参照したい。

土岐（2003）は、中古語の会話文において動作動詞が終止形で終止する用例を観察し、119 例のうち 31 例が「現在状況」を表すとする。

鈴木（2009: 173-174）は中古語において助動詞の付かない形（はだかの形）の動詞が持つ意味の一種に「継続的意味」があるとし、「運動の過程が継続のなかにあることを表わす意味で、はだかの形の不完成相としてのものとも中心的な意味である」と説く。その上で、鈴木（2009: 177-181, 193-195, 199-201）はこの「継続的意味」を表す動作動詞の具体例を豊富に挙げている。

大木（2009）も中古語において「動詞がいわゆる助動詞などを付属しないはだかの形で終止する文」における動詞のアスペクト的意味として「動きの継続」がありうることを認めている（ただしその割合は散文で 6% ほどだという）。

用例の意味の解釈には多少のゆれもあるようだが、文末の動作動詞の用例は動きの継続というアスペクト的意味で捉えられるものが一定の割合で存在するということは、一般に認められていると言って良い。動きの継続以外では、現代語と同様にテンス的に未来の事柄を表す用法、遂行文としての用法、一回的な動きではなく習慣的な動きを表す用法などもあるとされるが、それらが一回的に眼前の現状を視認することを表す「と見る」における視認内容になりえないのは当然であろう。従って、動作動詞を承ける「と見る」の用例がある程度少なくなることも当然と思われる。しかし、もし「と見る」が単に一回的な視認を表すだけなのであれば、何らかの継続する動きを視認内容とする用例が全く得られないのは不審である。

#### 4.5.2 瞬時の視認を表すということ

「と見る」は動作動詞以外であれば以下の通り様々な要素を承ける<sup>(11)</sup>。

---

(11) 拙稿（2016）で示したように、「と見る」はキ・ツ・伝聞ナリを承げにくいですが、これは主体が視認した眼前の状況を引用するためと考えられる。

- (51) 帰りて、帥、四の君に、「かうかうのたまへる。小さくおはする君はいくつぞ」と問へば、四の君、「十一ばかり」といらへたまへば、「〈古いたり〉と見しおとどの、いかに幼き子を持たまへりける」と言ふもをかし。(落窪・四・334)
- (52) あこぎ、〈部屋の戸あきたり〉と見て、例の三郎君呼びて、…(落窪・二・118)
- (53) また、この男、志賀へとてまうづるに、逢坂の走井に、女どもあまた乗れる車を、牛おろして立てたりければ、この男、馬からおりて、とばかり立てりけるに、車[の人々は]、人來ぬと見て、牛かけさせていきけり。(平中・二五・493)
- (54) 二重ねにこまごまと書きたるを見たまふに、紛るべき方なくその人の手なりけりと見たまひつ。(源氏・若菜・4-250)
- (55) 久(しき)より欲は遇なりと見キ。(願經四分律(小川本)・甲・4-20)
- (56) 何以故、彼の諸の衆生い、若如来般涅槃(し)たまはず[不]と見ては、恭み敬ひ、遭フこと難しといふ[之]想を生サジ[不]。(金光明最勝王經・9-8)
- (57) 光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時のそらめなりけり(源氏・夕顔・1-162)
- (58) もとごとくに波うち寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかよふ。おもしろしと見るに堪へずして、船人のよめる歌、…(土佐・一月九日・26)

動作動詞でも(51)～(53)のようにアスペクト形式が付いたものなら「と見る」で承ける用例が一定量得られる。(51)(52)では、タリが結果の残存というパーフェクト的意味を表している。視覚主体は動作動詞の表す動きが展開していく様子を視認しているのでなく、その動きによって生じた結果が残存している状態を視認したものと解されよう。(53)のヌは、動き全体から一局面を切り出して示す機能があることによって生起できているであろう。(54)～(58)の「と見る」は、事物の状態を視認内容とし

ている。

タリ・リの表す残存した結果状態や、形容詞等の表す状態は静的なものであり、瞬間的に視認することが可能である。また、ヌで示される一局面であれば、やはり瞬間的に視認することが可能であろう。これに対し、動きが止まらず展開している状況を視認するには一定の期間が必要である。動作動詞を承ける用例は得られず、以上のような用例は得られるという事実は、「と見る」が瞬時の視認を意味することを示していると考えられよう。

夢の内容を引用する「と見る」の場合に動作動詞を承ける用例が一定数得られるのは、夢が動画のように時間軸上で展開していくものだからであろう。次のように、夢の時間軸上での展開が複数の文によって順次描かれていくような場合はそれが分かりやすい。

- (59) わがおもと生まれたまはむとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下の蔭に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。(源氏・若菜上・4-114)

鈴木(2009:178, 180)は夢の内容を引用する「と見る」を挙げ、前接する動作動詞のアスペクト的意味を「継続的意味」と解しているが、おそらく鈴木(2009:237)で言う「叙事的意味」や土岐(2003:82)で言う「物語現在」を表すと見る方が適当なのではないかと思われる。この「叙事的意味」「物語現在」とは、「テンス的な基準時点は発話時ではなく、物語の進展とともに移動し、つねに物語のもっともあたらしい段階が基準時点」(鈴木2009:237)となり、「語るべき事柄の連鎖を、テンス・アスペクト・ムード的に分析しない形で生起順に提示する」(土岐2003:82)ようなものである。現代語でも、「午前7時、駅に到着する。急いで切符を買う。8時、会議に間に合う。」のような書き方があるが、(59)はこれに近いもの

と解される。

以上のように、「と見る」は基本的に瞬時に視認した内容を承け、夢の内容を引用する場合には動的に展開する内容を承けると考えられるのだが、このことから、次のようなことも言える。すなわち、動作動詞を承ける用例が「を見る」に比べ「と見る」において少ないことは、準体言＋ヲと引用助詞トの統語論的な性質の違いによるものではない、ということである。引用助詞トとの共起という統語論的な条件によって「見る」が瞬時の視認を表すという解釈にほぼ限られてくることは確かであるが、引用助詞トと共起していても、夢を見ることを表す「見る」は動的事態を視認する意と解されるからである。つまり「と見る」が承ける語彙は、補文を作るヲ・トとの共起という統語論的な条件ではなく、述語動詞「見る」についての意味論的な条件によって変わるものと考えられる。

なお、動作が展開する様子を目視することを表す場合には、通常は「を見る」を用いることになる。拙稿（2016）で述べたように、「と見る」はしばしば視覚対象に対する主体の評価を前接語句に含むが、動作が展開する様子を目視する行為と、その動作に対する主体の評価の両方を示したい場合には、次のように「を見る」とその後続内容とで分析的に示すしかなかったのではないと思われる。

- (60) やんごとなき上達部の持ちてめぐりたまふを見る人々、「いみじう老いのさいはひ、面目ありける人かな」と誉む。(落窪・三・265)

#### 4.5.3 「と見る」は複合辞か

中古語の「見る」がトと共起すると瞬時の視認を表すようになるという現象は、現代語の「見る」がトと共起すると判断の意味が前面に出るようになるという現象と似ている。すなわち、現代語にしても中古語にしても、「と」と「見る」が共起した形によって発揮される独自の意味が存在し、それはその構成要素である「見る」の持つ本来の意味（視覚全般）と

多かれ少なかれ相違しているのである。そして、「と」と「見る」のそれぞれが持つ意味を単純に合計するだけでは新たに発揮される意味にならない。これは「と見る」に複合辞的な性格があることを示していよう。

ただし次のように「と」と「見る」の間に他の要素が割り込む用例があるのは、「と見る」が未だ1つの辞的形式として形態的に固定してはいないことを示している。この点からは、複合辞と見るよりはある種のコロケーションとして捉えておくのが適切な段階にあるのだと考えられる。

- (61) 大殿油ほのかなれど、御けはひいとめでたしと宮は見たてまつれたまふ。(源氏・梅枝・3-413)

## 5. 「ことを見る」について

最後に、訓点資料に見られる「ことを見る」という用例にも触れておく。

- (62) 時に、六群（の）比丘、和上、和上の等キ（ひと）、阿闍梨、阿闍梨の等キ（ひと）、起迎<sup>ず</sup>セ不（し）てあることを見ツ。(四分律・433-21)
- (63) 梵志歆喜（し）て自（ら）念はく、『王、[及]夫人、内外の大小、皆我に服事す。唯（た）太子のみ敬信<sup>ず</sup>することを見不。今日好華を以て供養す。甚善無量なり』（と）。(大智度論・891-5)
- (64) 若し【見】有ル人の〔於〕我が法の中に、出家すること得<sup>エ</sup>、已<sup>(中)</sup>に具戒（し）富徳にして学无学の行を精進して修行し、乃至、最後の極果を証得することを見ては、…(地蔵十輪經・東大寺図書館本・61-14)
- (65) …或（いは）能（く）无上乗の法を伝通して〔令〕広（く）流布（せ）しめて有情を利樂せむことを見て、彼レ〔於〕是（の）如き説法の師の所<sup>みも（と）</sup>（に）、…(地蔵十輪經・東大寺図書館本・76-13)

(66) 汝, 我に違 (ふ) こと勿 (け) ムや。若 (し) 我が頭を施 (する) ことを見て, 愼 (み) て憂悩 (を) 生 (す) こと勿 (け) ムや。(大方広仏華嚴經・381-13)

これらは4節までで見た「を見る」「と見る」と同様に目視した事態を表す節を承けている。ただし、これと同様の用例は和文資料では見出しがなく、訓点資料でも多くはない。前接語も(66)のように訓点が付されていないものが過半数を占めていて、「ことを」を片仮名で記した確実な用例も見当たらない。このように、「ことを見る」という形が広く使用されることは無かったようだが、一定数の用例が得られることはどう捉えるべきだろうか。

表5では、「ことを見る」の用例数を集計した。「ことを」が訓点によって示された用例を抽出対象としている。表1～4より簡略だが、見方は同様である。表5から、「ことを見る」は9世紀頃の訓点に見られ、間もなく衰微することが分かる。十分な量のデータとは言い難いが、「を見る」と同様の分布状況が見て取れる点から考えると、「ことを見る」は「を見る」と同様の性格を持っていたようである。

大坪(2015:29)が「上述したコト(引用者注:平安時代の訓点に見られる

表5 訓点資料において「ことを見る」が承ける要素

		動作動詞	状態動詞	形容動詞	キ	タリ	ツ	ム	合計
合計		10(8)	3(1)	1(1)	0	1	1(1)	1	17(11)
9世紀頃加 点	四分律		1						1
	願經四分律(小川本)	1(1)		1(1)					2(2)
	願經四分律(聖語藏本)	2(2)							2(2)
	成実論		2(1)						2(1)
	大智度論	1							1
	地藏十輪經	4(3)				1	1(1)	1	6(4)
	大方広仏華嚴經	2(2)							2(2)



コトの諸用例)は、一見無用な存在であつて、活用する語から活用する語へ直接続けるのと変らないやうに見えるが、コトによつて前の語句を一度纏めた上で、後の活用する語や助詞に続けるといふ構造であつて、原文の複雑な文意を整理するのに役立つてゐる。恐らくそのために工夫された翻訳文法であらう。」と述べるように、訓点資料においてはいったん名詞句としてまとまることを明示するための「こと」が用いられる。「ことを見る」もその一環として捉えることができよう。平安初期に少しの用例が得られて、中期には確実な用例が得られなくなるという通時的变化があることも、初期の漢文訓読において試された臨時的な訓読方法に過ぎなかった可能性を思わせる。

ただし、「ことを見る」が平安初期に確実に使われていたと考えられるのであれば、それは文法史的に興味深い情報を提供するものと思われる。すなわち、3節で示したように中古には同格準体を承ける「を見る」の用例が確実に見て取れるわけだが、同格準体に対して補完すべき体言があるとするば、それは「こと」なのではないか、ということが示唆されるのである。歴史上、準体言は準体助詞ノが承けるようになるという経過をたどるようだが、平安初期の段階では形式名詞「こと」の消去という分析が可能なのかもしれない。

## 6. まとめ

本稿では、中古語において視覚動詞「見る」が補文と共に起した「を見る」「と見る」「ことを見る」の用例を分析した。以下にその結果を要約する。

- ①和文資料においては「と見る」が視覚主体の態度・評価を表す語を承けるのに対して「を見る」が視覚主体の態度・評価を表す語を承けないという違いが認められるが、訓点資料の「と見る」は視覚主体の態度・評価を表す語を承ける用例がほぼ無い。この点においては、訓点資料の

「を見る」と「と見る」はかなり近い意味で用いられているように見える。

- ②「人のまかりいづるを見て」では「を見る」の承ける準体言が動作動詞によって形成され、その動作動詞と格関係を持つと解される名詞（かつ準体言に対して主名詞として補完できそうな名詞）が準体言内部に現れているが、このような構造の準体言は近藤（1981）で言う同格準体と判定される。この場合、準体言の表す事態が「見る」の主体による視覚対象になっており、やはり、視認内容を承ける「と見る」と意味的に近似するように見える。
- ③「を見る」と「と見る」は、前接する活用語の種類が多岐にわたる点でも共通するが、動作動詞を承ける用例は「と見る」では非常に少ない。動作動詞は文末で動きの継続を表しうることから見て、動作動詞を承けにくい「と見る」は継続する動きを視認することは表さないと考えられる。「と見る」は、タリ・リ・ヌ等のアスペクト形式で示される事態の一局面や結果状態、あるいは状態動詞・形容詞の表す状態といった、瞬時に視認できる事柄のみを承ける。このことから、「と見る」は瞬時の視認を表すと考えられる。
- ④夢の内容を引用する「と見る」は動作動詞を承けることができる。「と見る」が動作動詞を承けるか否かは、補文が準体言＋ヲか引用助詞トのどちらの形を取るかという統語論的な相違に起因するのではなく、「見る」が夢を見ることを表すか外界の視認を表すかという意味的な相違に起因する。
- ⑤「と見る」が瞬時の視認を表すのは、本来「見る」が視覚全般を表すことと意味的に相違している。ゆえに「と見る」は複合辞化しつつある可能性があるが、「と」と「見る」の間に他の要素が割り込むことがありうる点では、未だ1つの辞的形式としては成り立っていない。
- ⑥「ことを見る」の用例が平安初期の訓点に多少見られることは、平安初期において準体言が形式名詞「こと」の消去によって成り立っていた可

能性を示唆する。

視覚対象か視認内容かという相違のみでも「を見る」と「と見る」の意味的な差を認めることはできるだろうが、日常一般において、視覚対象を目視すればそれは視認内容にもなるのが普通であるから、解釈上、両者の相違が殆ど感じられなくなることが多い。本稿ではこの理解では不十分と考え、「と見る」は瞬時の視認内容を承けるのに対し、「を見る」はそのような制限は無く視覚対象全般を承けるという相違点があると主張した。

諸賢のご批正を乞う次第である。

依拠テキスト（用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を〔 〕に示した。）

【和文資料】古今和歌集・竹取物語・伊勢物語・平中物語・土佐日記・落窪物語・蜻蛉日記・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・堤中納言物語……新編日本古典文学全集

※用例の検索に際し、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（バージョン 2017.3 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>）を使用した。

【訓点資料】○大乘阿毘達磨雜集論……鈴木一男（1954 a）「聖語藏御本唐写 大乘阿毘達磨雜集論 調査報告その一」『訓点語と訓点資料』2 ○四分律，岩淵本願經四分律……大坪併治（2001）『石山寺本四分律古点の国語学的研究』風間書房 ○小川本願經四分律……大坪併治（1958）「小川本願經四分律古点」『訓点語と訓点資料』9 ○聖語藏本願經四分律……鈴木一男（1979）『初期点本論攷』桜楓社 ○成実論（卷十一～十六，十八，二十一～二十三）……稲垣瑞穂（1954 a）「東大寺図書館蔵本成実論天長点上」『訓点語と訓点資料』2，同（1954 b）「東大寺図書館蔵本成実論天長点下」『訓点語と訓点資料』3，鈴木一男（1954 b）「聖語藏御本成実論卷十三天長五年点訳文稿」『奈良学芸大学紀要』4-1，同（1955）「聖語藏御本成実論卷十八天長五年点について」『奈良学芸大学紀要』5-1，同（1956 a）「聖語藏御本成実論卷十一天長五年点訳文稿」『書陵部紀要』6，同（1956 b）「聖語藏御本成実論卷十六天長五年点」『奈良学芸大学紀要』5-3，同（1957 a）「成実論卷二十二天長五年点」『書陵部紀要』8，同（1957 b）「東大寺図書館蔵成実論卷十五天長点」『南都仏教』3，同（1957 c）「東大寺図書館蔵成実論卷二十一天長五年点」『訓点語と訓点資料』8，同（1962）「聖語藏御本成実論卷十四天長五年点」『奈良学芸大学紀要』10-2，同（1966）「成実論卷二十三天長

五年点訳文稿』『南都仏教』18 ○金光明最勝王経……春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』勉誠社 ○大唐三蔵玄奘法師表啓……築島裕（1955）「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点」『訓点語と訓点資料』4 ○大智度論……大坪併治（2005）『石山寺本大智度論古点の国語学的研究 上』風間書房 ○大方広仏華嚴経……大坪併治（1992）『石山寺本大方広仏華嚴経古点の国語学的研究』風間書房 ○地藏十輪経・妙法蓮華経玄賛……中田祝夫（1954）『古点本の国語学的研究 総論篇 訳文篇』勉誠社（1989年の改訂版に拠った） ○妙法蓮華経……築島裕・小林芳規（1956）「故山田嘉治氏蔵妙法蓮華経方便品古点釈文」『訓点語と訓点資料』7 ○金光明最勝王経註釈……田淵雅生（1987）「東大寺図書館蔵本金光明最勝王経註釈の訓点」『訓点語と訓点資料』76 ○百法頭幽抄……稲垣瑞穂（1976）「東大寺図書館蔵本 百法頭幽抄古点」『訓点語と訓点資料』58 ○弁中辺論……築島裕（1954）「聖語蔵 弁中辺論天曆点」『訓点語と訓点資料』1 ○漢書楊雄伝……大坪併治（1975）「漢書楊雄伝天曆点解説文」『岡山大学法文学部学術紀要』36 ○無量義経……兜木正亨・中田祝夫（1979）『無量義経古点』勉誠社 ○無畏三蔵禅要……小林芳規・柚木靖史・豊田尚子（1993）「山口市在龍蔵寺蔵 蘇悉地羯羅供養法卷上平安中期筆点」『訓点語と訓点資料』92 ○七喻三平等十无上義……田淵雅生（2005）「西大寺所蔵『七喻三平等十无上義（仮題）』一卷所見の古訓点について－解説並びに資料（原文翻刻・訳読文・語彙索引）－」『南都仏教』85 ○沙弥十戒威儀経……小林芳規（1987）『角筆文献の国語学的研究 影印資料篇』汲古書院 ○仏説太子須陀拏経……小林芳規・松本光隆・鈴木恵（1984）「石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点」『訓点語と訓点資料』71・72 ○不動儀軌……月本雅幸（1980）「東寺蔵不動儀軌万寿二年点」『訓点語と訓点資料』65 ○護摩蜜記……小林芳規（1954）「西大寺蔵本護摩蜜記長元八年訓点の訓読文」『訓点語と訓点資料』1 ○不空羼索神呪心経……小林芳規（1958）「西大寺本不空羼索神呪心経寛徳点の研究－釈文と索引－」『国語学』33 ○恵果和尚之碑文（東大本）……山口佳紀（1966）「東大國語研究室蔵恵果和尚之碑文古点－解説文と調査報告－」『訓点語と訓点資料』33 ○南海寄帰内法伝……大坪併治（1968）『訓点資料の研究』徳間書房 ○梵字悉曇字母并釈義……月本雅幸（1994）「仁和寺蔵梵字悉曇字母并釈義治暦四年点」『訓点語と訓点資料』93 ○恵果和尚之碑文（高山寺本）……山口佳紀（1967）「高山寺蔵恵果和尚之碑文古点」『訓点語と訓点資料』35

【その他】雪之丞変化・大菩薩峠・銭形平次捕物控……『青空文庫』パッケージ（20201001 <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>）

※用例の検索に際し、国立国語研究所『ひまわり』（バージョン 1.6.7 <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php/himawari>）を使用した。

参考文献

- 石垣謙二（1956）『助詞の歴史的的研究』岩波書店
- 大木一夫（2009）「古代日本語動詞基本形の時間的意味」『国語と国文学』 86-11 pp.21-31
- 大坪併治（2015）『平安時代における訓点語の文法 上』風間書房
- 近藤泰弘（1981）「中古語の準体構造について」『国語と国文学』 58-5 pp.18-31
- 鈴木泰（2009）『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- 辻本桜介（2016）「古代語における引用表現「～と見る」について－現代語と比較して－」『国語と国文学』 93-1 pp.55-68
- 土岐留美江（2003）「古代語と現代語の動詞基本形終止文－古代語資料による「会話文」分析の問題点－」『社会言語科学』 6-1 pp.74-88（社会言語科学会）
- 松本正恵（1999）「視覚動詞を中心とした接続表現」森田良行教授古稀記念論文集刊行会編『日本語研究と日本語教育』明治書院 pp.206-221
- 山口康子（1998）「平安和文の「夢」の引用－『源氏物語』を中心に－」『国語と教育』 23 pp.1-11（長崎大学国語国文学会）

【付記】 本稿は、令和2年度 JSPS 科研費（課題番号：19K13210）による研究成果の一部である。

（つじもと おうすけ・関西学院大学文学部助教）